Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼稚園における保育実習生の受け入れ―その3

―― 責任実習について ――

島　田　る　み　（吹上中央幼稚園）

《はじめに》

教育実習は、幼稚園教諭免許取得のために所定期間義務づけられている現場での体験学習である。幼稚園の見学・観察を通して、幼稚園の全体像を知ることを目標として教育実習Ⅰが位置づけられている。更に、教育実習Ⅰを踏まえ、指導者的役割を担った現場実践を目標とされているのが教育実習Ⅱである。短い実習期間の中で学べきことは多い。その中で特に実習生と実習生受け入れ園の指導者の負担を重くしている「責任実習」について考察してみる。

《方　法》

現在までの実習生の実習ノート・責任実習用の日案・実習終了後の反省会の記録を対象とする。

実習ノートの総合反省の内容や責任実習終了後の反省感想等は、細かく記載されているものが多く、実習期間における習得内容と感想を読み取ることが容易である。

《考　察》―責任実習終了後の反省・感想を読んで―

例Ⅰ……U実習生　4歳児クラス

活動名　〔ひっかき絵〕

活動のねらい

・子ども達が楽しんでくれるように一日実習をする。

・生活の中で楽しかったことを言葉のかわりに絵で表現する。

・様々な色が出てくる楽しみを味わう。

感想

今日一日実習をして、改めて一人で進行していくのは大変だと思いました。今日までこのクラスの子ども達と園生活を過ごしてきて、コミュニケーションは他のクラスの子よりできていると思いましたが、その時その時の子どもの行動は異なるため、対応を考えながら進めていく責任実習は大変でした。一日の流れをただ追ってしまいがちになり、先へ先へと急いでいたように思います。子どもの興味関心を捉え …… 活動内容には個人差があり予定時間は越えましたが、本日のねらいは達成されたように思います。

例Ⅱ……Ⅰ実習生　5歳児クラス

活動名　〔動物園作り〕

活動のねらい

・遠足で見た動物を思い出したり、こんな動物がいたらいいなというのを思い浮かべながらグループ毎に工夫して楽しく動物園を作る。

感想

今までの実習でも多くのことを学んできましたが、今回の責任実習ほど達成感を得、充実した実習はありませんでした。責任実習をやったクラスには5日間入れて頂き、その分子ども達と接する時間も多くより深く関われました。自分で活動（研究題材）選び、日案作成そして実践したことにより、観察実習だけでは味わうことのできなかった問題点や難しさ、更には楽しさを実感することができた。今思うと、計画から実践まで予測不能のことが多く予期せぬことがありましたが……。

例Ⅲ……T実習生　5歳児クラス

活動名　〔ころがしドッジボール〕

活動のねらい

・手でボールを扱い、集団でゲームを楽しむ

・戸外で力を出し切って遊ぶ

感想

一番不安や心配があったのが責任実習でした。日案の書き方さえ知らない私が一日先生として子ども達を引っぱっていくことができるだろうかと不安で一杯でした。指導教諭に責任実習の主活動を相談したところ、現在のこのクラスの子ども達にはこの主活動の進め方は難しいのではないかとアドバイスされた。しかし最初に決めていた活動だったので少し手直しをして実践してみましたが、子ども達と私がバラバラのまま活動が流れていってしまいました。活動を進めるのに必死で子ども達の動きや表情を見る余裕など全くない私は、活動設定の難しさを思い知らされました。

例Ⅳ……K実習生　5歳児クラス

活動名　〔なぞなぞあそび〕

活動のねらい

・友達と協力しながらなぞなぞを楽しむ

感想

日案の立て方から先生方には何度も目を通してもらい様々なアドバイスをいただいた。初めは製作を考えていたのですが、「最近製作活動が続いているので何か考えながらみんなで楽しめるものがいいのでは」と先生から提

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

案され、なぞなぞあそびをすることにした。5歳児にふさわしいなぞなぞを考え、教材研究や準備は自宅に帰ってから遅くまでかかりました。…… 先生方の動きを見ていると流れが自然に見えるけれど、実際に子ども達の前に立ってみると余裕が持てませんでした。

実習生は、幼稚園という現場に期待と不安を抱いて臨んでいる。初めての幼稚園現場に臨む教育実習Ⅰの見学観察実習はもとより、責任実習を含む教育実習Ⅱに臨んでも、実習生は緊張を隠せない。子どもと関わる体験の少ない傾向にある近年の学生であるが、実習生受け入れ園として、実習生が多くの子どもと接する機会を得てより充実した現場実践ができるよう、実習形態等にいろいろ工夫している。中でも実際の責任実習の活動においては、実習生個人の幼児の実態の把握度や、指導助言のやり方やその理解度の違いなどから成果は様々になりがちであるが、結果に一喜一憂するのではなく、今後の勉強の課題として反省点を捉えていくよう期待したい。

例Ⅰから例Ⅳは、実習生の責任実習終了後の反省並びに感想である。

例Ⅰの実習生は期間中同じクラスで現場実践している。幼児の実態を把握する観点からは、同じクラスで実習することで、集中して子ども達と担任との関わりや援助の仕方を学べる利点がある。保育者の学級運営や個性の違った子ども達に対する関わり方など、配属クラスの担任の行動が実習生に与える影響は大きいと思われる。指導者（担任）・クラスの子ども達・実習生の関係がスムーズに運んだ結果、責任実習でのねらいはほぼ達成されている。しかし、責任実習のために同じクラスでの実習形態を取ったとするならば、他クラスや他学年の先生と子ども達との関わり方など学ぶ場面は狭まっているといえよう。

例Ⅱの実習生は、責任実習クラスを予め決めておくことによりそのクラスを中心に配属クラスを計画的に実践できるようになっている。責任実習を配慮しながら組み立てられる配属クラス計画は、クラスの子ども達と実習生との関係をより深められるように考慮されている。年間行事や園全体の活動を見ながら責任実習の活動設定が出来ており、また、自由遊びにおいての異年齢児との関わりから得たヒントを教材に用い、計画的に教材研究や準備がなされたことが記されていた。計画的な教材研究や用意周到な準備が如何に日々の活動に大事かということを体得した実習生といえよう。

例Ⅲの実習生も、責任実習クラスが決められており計画的に配属クラスが組み込まれていた。しかし、実習クラスの子ども達の実態が把握出来ずに無理な活動を設定してしまい、アドバイスを受け入れる柔軟さに欠けていた。日案の書き方等については、養成校によりその指導に格差が見られるが、実習現場で日案の書き方から指導するには現場担当に懸かる負担が大き過ぎよう。責任実習後の評価は、失敗をし後悔の残ることも多く、実習生は事前の学習を深めて実習に臨んで欲しい。指導教諭としては、失敗を謙虚に受け止め今後の課題にしてほしいと願うものである。

例Ⅳの実習生は、責任実習クラスが決まりそのクラスを中心に実践しているところは、例Ⅱ・Ⅲと同じである。例Ⅳの実習生は責任実習の主活動を数回変更している。「今この子ども達は何を求めているか」の見定めを学んだ。また、年間計画・月案・週案・日案と、各領域や行事を絡ませながら立てる日案作成の過程を学び、5歳児にふさわしいなぞなぞあそびを考えた。年齢を考慮した計画を立てたところに意義がある。

以上、例Ⅰから例Ⅳを列挙し実習生の感想を拾いながら、責任実習の取り組み方を検討してみた。他に多くの感想を持つが、実習生にとって、教育実習イコール責任実習の思いは、共通のようである。

《まとめ》

実習生は、大学または養成校においては学ぶことの出来ない現場を体験する。大学・養成校は、実習生を現場に送り出すにあたり、学校としての実習目標を達成させるために、実習現場に種々の“ねらい”を要請してくる。例えば、〔＊指導の場に参加しながら園の環境、幼児の実態、指導内容、教師の役割等について具体的、総合的に理解する＊園生活における経験や活動を部分的に受け持ち、責任をもって計画を立てて指導する。なお、指導の事前、事後には必ず担任の指導を受ける〕などである。

初めて現場を体験する実習生は、少子化時代を反映してか、子どもとの関わりをほとんど体験することなく成長してきた。したがって、幼児の年齢や実情に応じた態度や、一人ひとりの幼児の興味関心や言動の背景を理解して対応することに苦しんでいる。

教育実習の総括としての責任実習では、自らを省みて、今後の勉学の課題にしたいと反省をしている。実習生の多くは、就職という前提を控えていることもあり、保育者を目指す者としての自覚を持ち、活動へのねらいを定め、真剣に取り組み真摯な姿で努力をしている。しかし、前述のように、子どもと接する経験が少なく、子どもを理解する場もなく実習に臨むため、大学・養成校の要求する目標を達成することに極めて困惑している。願わくば、地域社会における子ども集団、身近な青少年団体、スポーツ・文化活動など子どもと共に生活する機会を出来るだけ体験することが望ましく、また、大学における生活の中にもこのような機会を導入し、体験出来るような配慮が望まれる。

NII-Electronic Library Service